

度を越した道楽だが（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2010/4/20 7:00 | 日本経済新聞 電子版

道楽も、度を越すと、仕事と違って、根が好きで始めたものだけに、行く処まで行ってしまうようだ。深酒、濫読、音楽くらいが、私の趣味で、いずれも過剰に淫（いん）するようだ。月と酒をうたい、飲みすぎで死んだ李白のような才能もなく、ひたすら飲んで、「禿頭や白髪ガ相ツドイ タチマチ酔ウテ歌トナル」といった類の酔っ払いに過ぎない。濫読といっても、学問とは程遠く、前日のアルコールを飛ばすため、夜明け前に起きて、ぬるい湯に長々と浸って、読み続けるだけ。音楽にしても、楽理を極めるのは、とうの昔に諦めて、夜毎、昼間の雑事を忘れて、眠りの助けにする程度。それでも、乱立する酒瓶、本、CDが散乱して、足の踏み場もない部屋に戻ると、なんだか心やすまるのだから、不思議なものである。

一応、経営者ということで、年度末は多忙に決まっているのだが、ここ数年、道楽と揶揄（やゆ）されている上野の音楽祭を主宰していることで、桜の蕾（つぼみ）が膨らみかける頃から、桜の花びらが舞って、桜の饗宴が終わるまで、眠る時間がなくなるほど忙しい。誰に頼まれたわけでもなく、勝手に始めてしまったものだから、文句も言えず、ひたすら忙殺の時期を過ごすのである。しかも、夜毎の酒は途切れることがないわけで、音楽祭が終わる頃には、頭がしびれるようになって、コンサートに酔っているのか、酒の酔いが続いているのか、わからなくなってくる。

「東京・春・音楽祭—東京のオペラの森」とタイトルをつけているこの音楽祭、そもそもは小澤征爾さんと飲んできていた折、東京は大きな音楽の市場だけど、東京発の音楽がないのは寂しい、東京から世界に発信するオペラをつくろうという冗談話が、小澤さんの熱意で始まってしまったものである。酔狂としかいいようのない始まりである。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。

音楽ファンではあっても、音楽ビジネスには、頓珍漢としか言い様のない私は、ただただ成り行きに乗って、始めてみたら、あまりのコストに仰天したまま、それでも続けているうちに、上野の地域に根を張った人々の応援が始まり、応援してくれる企業や個人の方々の後押しが始まって、やめるにやめられなくなって、今年で6年目となってしまった。小澤さんと約束した4つのオペラ製作までは、なんとかと思っていたのだが、5年目になったら、ほんとうに地域に根ざす音楽祭に発展させようという気になってしまい、去年からは、上野のさまざまな文化施設の協力もあって、博物館、美術館、科学博物館等々での演奏会もいれど、50を超えるコンサートを催し、ずいぶん沢山の方々に楽しんでいただき、6年目にして、ようやく上野の春を彩る音楽祭として定着してくれたようだ。

上野の博物館を計画したのは、明治5年、財政難であった筈の維新政府の若々しい志から。東京文化会館の完成が、昭和36年だから、ほぼ百年にわたって、芸術の教育機関の設立を含め、営々と文化ゾーンのインフラづくりが続いてきたことは、ほんとうに頭が下がる。西洋文化受容の地であり、花見の名所の上野で、酔狂から始めたとはいえ、この音楽祭を発展させることが、せめてもの恩返しというか、維新政府の「志」を将来につなげたいと、酔った頭で考えている。

10日の土曜日が、今年の音楽祭のフィナーレで、かねがねこの音楽祭を支援していただいているリッカルド・ムーティさんの指揮で、モーツァルトのハフナー交響曲とカールオルフの「カルミナブラーナ」の素晴らしい演奏で幕を閉じた。

練習からコンサートまで、日々、オーケストラが見違えるような音をだし、微細なニュアンスを表現するようになっていくのを見てみると、日本の演奏家の潜在能力の高さにあらためて感動する。なによりも、その潜在能力を形にしていってムーティさんの凄さを実感したものである。たぶん、経営というのも、ムーティさんのようなトップがいれば、見違えるような蘇生をする企業が多いのではないかと、余計なことを考えてしまう。それは国についてもいえることだろうけれど。それはともかく、「カルミナブラーナ」の演奏会後の聴衆の熱狂は、久しくなかったもので、それがなによりも嬉しかった。

それにしても、背筋が寒くなる思いをしたのは、音楽祭の終わった後、すぐに起こった、アイスランドの火山の爆発である。もし、半月ほど早く、火山の爆発が起こって、欧州の空港閉鎖が始まっていたら、空路に頼る欧州の演奏家の来日は、そのほとんどがキャンセルとなって、音楽祭は形にならなくなってしまったはずである。

飛行機の利用を前提としている、グローバリゼーションというのも、ひとたび、巨大な自然の脅威にさらされてしまうと、あっけなく崩壊する。昔、文化人類学者の今西錦司氏が、生前、放談として、緑の破壊について、「なあに、人間がなにかの理

由で少なくなったりすれば、あらゆる場所が、すぐに原生林に戻る」と、冗談で話されていたことを思い出した。地球という惑星で生きる生物である人間の営為も、そう考えると、なんだか、存在そのものがいとおしくなる。

鈴木幸一 IIJ社長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

[経営者ブログ トップ](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.